

おとなのための「解説」

■世界自然遺産候補地・小笠原諸島

小笠原諸島は、東京の南 1000km に浮かぶ島々。一応、東京都です。この島々は、一度も大陸とつながったことがないばかりかその影響も受けていない「海洋島」です。太平洋が人間を含むすべての生物について何千万年も前から島々と大陸と隔ててきたのです。このため、本州や東南アジア、オセアニアなど様々な地域から「泳ぐ」か「飛ぶ」か「流されてくる」か「台風などで飛ばされてくるか」してやってきたごく限られた生き物を祖先として、隔絶された島の中だけでひっそりと独自に進化した、小笠原固有の生物種の楽園になっています。だから、海水に弱いカエルやミミズもいませんでしたし、ほ乳類は空を飛べるコウモリだけでした。そのかわり、鳥のフンに紛れて運ばれる多くのカタツムリがミミズの代わりをして土を作り、ほ乳類の役割は鳥が果たしてきました。とても特別な、世界でここにしかない生態系なのです。

このような小笠原の特殊な生き物と生態系は他にも類が無く、世界自然遺産としての価値を十二分に持っていると考え、2007 年 1 月に日本国政府は小笠原諸島を世界自然遺産の新たな候補地としました。今後 2～3 年で遺産登録に向けた準備を進める予定です。

■小笠原の自然に迫る危機・外来種問題

1830 年の小笠原入植以前には、島にはネズミもネコ

もヤギもブタもいませんでした。しかし、その後、様々な生き物、つまり外来種が人に伴って小笠原の島々にやってきました。これらの外来種は様々な自然環境を破壊してい



きます。例えばネコやネズミは固有鳥類や海鳥を襲います。ヤギやネズミに嗜好された植物は集中的に食われ、残りあと数株と絶滅寸前のものも多いですし、ネズミやブタは世界にここだけにしかない貴重なカタツムリを食べます。父島母島の昆虫類も世界にここだけというものが多いたのですが、アメリカから来たグリーンアノール（トカゲ）やオオヒキガエルの食害で絶滅したものもあるといわれています。植物も同様で東南アジア原産のアカギ、オーストラリアから来たモクマオウ等の樹木が小笠原固有の森林を侵食して森を占拠しています。

このように猛威をふるう外来種は、貴重な「海洋島の特殊な生き物・生態系」を存亡の危機にさらしています。まさに世界遺産としての価値を外来種が食べ尽くしているのです。

■侵略的外来種としてのネコ

小笠原は暖かいために、本州などでは家に住むクマネズミが、山中に高密度に生息しています。クマネズミもまた、生態系を破壊する侵略的外来種ですが、小笠原のノラネコの一部は山中でこのクマネズミを主食にしながら生活していると考えられます。ネコはとても有能なハンターで、永年、人間と生活してきていても、その点は変わっていません。したがって、小笠原では、容易に自然に分け入り、山の生物を捕って暮らすことができます。当然、ネズミだけではなく、時折は鳥も捕食しますが、この鳥たちは小笠原固有の鳥であることが多く、ネコはこれらの希少な鳥たちを絶滅させる大きな原因の 1 つとなっているのです。

■母島南崎で実際にあったこと

この絵本に描かれた「マイケル」の話は、ほぼ実話です。小笠原には父島と母島の 2 つの島に人間が住んでいます。母島の最南端が、このお話の舞台「南崎」です。南



崎には、小笠原で唯一となった有人島にある海鳥繁殖地があり、母島の人々にも愛されてきた土地です。カツオドリが 10～20 巣、オナガミズナギドリが 10 巣くらい、毎年繁殖確認されていましたが、近年その数が減り、そしてたくさんの海鳥の死体が発見されたのです。

小笠原で鳥類の調査研究を行っている NPO 法人小笠原自然文化研究所がこの死体を調べたところ、死体の羽軸に残る歯形から犯人としてネコが疑われました。そこで自動撮影カメラを仕掛けたところ、このカメラに写っていたのが、この絵本の主人公「マイケル」たちだったのです。マイケルは自分より大きなカツオドリを捕獲し啜っていました。

この事態を重く見た、環境省小笠原自然保護官事務所と林野庁・小笠原総合事務所国有林課、東京都小笠原支庁は、自然文化研究所や母島の住民の方々の協力を受けてこれらのネコたちを捕獲することにしました。この中で問題となったのは捕獲後のネコの扱いです。山に戻すわけにはいかないし、島外への搬出を考えても引き取り手がない。殺処分するとすれば、社会的な合意が得られないおそれがありました。毎年、飼い主のいないイヌやネコが、およそ 40 万頭も殺処分されている実態を考えれば、ネコの殺処分はあたりまえとも考えられますが、その一方で外来種対策として捕獲された動物を殺処分す

ることとしたため、過激な一部の動物愛護団体から脅迫されたり、さらに中止になった事業もあります。

こういった状況の中で、小笠原から持ち出したネコを引き取ってくれたのが東京都獣医師会に所属する獣医師さんたちでした。「鳥は小笠原でしか生きられないけれど、ネコは都会でも幸せになれる。」という獣医師さんの言葉から、ネコも鳥も幸せになる、この捕獲プロジェクトが始まったのです。

その後母島では、ネコの好きな人も嫌いな人も鳥が好きな人も、皆が協力し「ネコ侵入防止柵」が建設され、ネコの捕獲も鳥の繁殖期に継続しています。2007 年の年末には、めでたくオナガミズナギドリが3羽巣立つことが出来ました。自然文化研究所により作られたこの柵は、最近、環境省によりリニューアルされ、2代目になっています。

そうそう、その後のマイケルですが、幸せ太りで、今はふっくらしていますよ。

■父島東平でのネコ捕獲事業

南崎での初めてのネコ捕獲の後、新たな問題が持ち上がりました。父島東平におけるアカガシラカラスバトの危機です。

アカガシラカラスバトは、この地球上にたった 40 羽しかいないとも言われる、正真正銘の絶滅危惧種です。我が国で最も絶滅の危険性が高い鳥であることは間違いありません。このハトを襲おうとしているネコが目撃されました。調査員が割って入り、未遂で終わりましたが、日常的にこのようなことがあることは容易に想像されました。

実は数年前から問題にはなっていたのですが、ネコの捕獲について関係者の意見が相違していてうまくいってなかったのです。そこで南崎の成功を基に、東平でもネコを関係者が共同で捕獲することにしました。予算がないので関係行政の担当者と住民のボランティアによる持ち回りで、繁殖期である 12 月から 3 月までの 4 ヶ月

間捕獲を実施しています。捕獲されたネコたちは南崎同様、東京都獣医師会に引き取り・馴化をお願いしています。ワナに捨てネコされたり、心臓病で亡くなったネコがいたり、様々な問題がありますが、このところ毎年アカガシラカラスバトの巣立ちを見ることが出来ています。

また、この捕獲を契機に関係機関が集まり「小笠原ネコに関する連絡会議」が発足しました。現在はこの会を中心に、様々な「自然保護のためのネコ対策」を実施され、さらに、ハトの保護活動も本格化しています。

■今後のネコ対策の展開とお願い

母島南崎・父島東平、それぞれの捕獲事業は「緊急捕獲事業」です。つまり、対症療法でしかありません。たくさんネコたちをダラダラと捕獲し続けて島外搬出しているだけでは何も解決しません。今後は、島内のネコが増えないようにするため、飼いネコの不妊去勢を徹底し、マイクロチップ挿入による個体識別が可能なようにし、出来るだけ屋内飼養するなど責任ある飼い方を推奨するとともに、ノネコ・ノラネコを減らすために広域的捕獲事業を開始したいと考えています。

ただ、やはり捕獲されたネコにも幸せになってもらいたい。この事業はあくまで自然保護のため、希少動物の保護のための事業ですが、「小笠原の鳥もネコも幸せになる」という初心を忘れてはならないと考えています。

そのため、島外の引き取り協力者（獣医師さんと飼い主さん）を増やすことは特に重要です。是非ご協力をお願いします。

また島内では、飼いネコは必ず不妊去勢手術をし、マイクロチップを入れて登録して下さい。出来るだけ屋内で飼いましょう。これ以上、仔ネコを捨てたり、不幸なネコを増やさないようご協力をお願いします。不

妊去勢や屋内飼養は、一般的にネコの寿命を延ばすと言われます。ネコにとっても良いことなのです。

■もう一つ、最後をお願い

大変残念なことですが、小笠原の貴重な自然を守るため、環境省や関係機関は、ネコ以外の、ノヤギやトカゲなど多くの外来種を殺処分しています。この島でしか暮らせない多くの命を守るため、仕方なく行っていることです。外来種とはいえ、決して命を粗末にしているわけではありません。食べるために動物を殺す、作物を守るために害虫を殺すことと同じように、とても大切な理由があることは、もうご理解いただけたと思います。

もし、お子様に聞かれたときは、生き物の命を守ることの大切さを教えてあげて下さい。私たちの活動は、自然と生き物の命を守るための活動です。この趣旨が誤って捉えられ、理由もなく生き物を殺すことを当たり前と感じる大人を育ててしまうことを恐れています。

外来種は悪い生き物ではありません。悪いのは持ち込んで放置した人間です。小笠原にお住まいの方や来島される方には、植物や昆虫も含め、今後新たな外来種を持ち込まないようお願いします。



マイクロチップ マイクロチップの埋め込み マイクロチップの読み取り